

# 都市再生のインフラ整備とソフト施策の 同調化に関する調査研究委員会

委員長 樋口恵一（大同大学）

## 1. 委員会活動の目的

本調査研究委員会は令和3年度に採用された委員会であり、アジア競技大会選手村が整備される予定の名古屋競馬場周辺からみなとアクルス周辺にかけて「港北エリア」を対象とし、都市再生のインフラ整備とソフト施策の時間的かつ空間的な組み合わせについて調査研究を進めている。昨年度の調査研究活動から、当該エリアは古くからの市街地と集合住宅地が混在し、縦横に走るインフラ施設（幹線道路・運河）や点在する大型商業施設が地域を分断するなどエリア全体を考慮したまちづくりが難しい点などを確認した。

そこで本年度は、前年の成果を活かして水辺空間のインフラ整備と、地域の魅力を創出および再発見する諸ソフト施策とを時間的かつ空間的にどのように組み合わせることが効果的であるかを検討する。さらに、インフラ整備とソフト施策の同調化に向けた産官学民の連携方策（まちづくり組織の設立等）のあり方について考察する。



地図1 再開発地と周辺地域

表1 委員構成

役職	氏名（所属／専門）
委員長	樋口恵一（大同大学／交通）
副委員長	秀島栄三（名古屋工業大学／臨海部再開発）
幹事	井村美里（名古屋市／まちづくり）
委員	後藤謙太（愛知県／景観）
委員	川口暢子（愛知工業大学／緑化・公園）
オブザーバー	水辺とまちの入口研究所

## 2. 水辺を活かした都市再生施策の検討

縦横に走る中川運河、荒子川運河は物流機能を果たし終え、都市の魅力になりうる水辺の再生が求められる。また、運河による地域分断、水質や災害リスクの面での弱点を克服する魅力化づくりは、選手村後利用事業の再開発と併せた当該地域における強みとなる。

そこで、水辺とまちの入り口研究所メンバーをオブザーバーとして招聘し、昨年度実施したまち歩きや住民アンケートの成果、国内外のまちづくりの事例を参考に、荒子川運河を対象として水辺を活かした都市再生施策の検討を行った。具体的には、テラスせな屋橋 3 階の川縁に参集し、①荒子川運河の将来像、②エリアマネジメント的まちづくり活動とハード整備の関連について議論を重ねた。ディスカッションの様子を写真1、施策イメージ案を表1に示す。



写真1 ディスカッションの様子

表2 施策イメージ案 (ディスカッションでの協議内容)

<p><b>A: 荒子川駅から運河へのアクセス</b></p> <p>駅から運河へバリアフリーにアクセスできている、駅から運河につながるデッキ、運河西端に水上広場、川へのスロープ、車いすで水上SUPに乗る人、盲導犬が泳ぐ水辺、荒子川公園では日本らしいイベントやBBQやマルシェ楽しむ人</p>	
<p><b>B: ①運河沿い倉庫</b></p> <p>倉庫が利用転換、多くの人々が訪れ楽しむ場所、川側に出入口があるホテルやカフェ・デザイン事務所、クリエイティブなイメージ、水上プロジェクションマッピング、水上ホテルや水上レストラン、買い物する人、プロムナードにはテーブルヤイス、屋外水辺に展示スペース 【図出典: <a href="https://www.terrada.co.jp/ja/service/event-space/t-lotus-m/">https://www.terrada.co.jp/ja/service/event-space/t-lotus-m/</a>】</p>	
<p><b>B: ②水辺を活かした住居</b></p> <p>住宅の川側に庭があり運河に出入りできる棧橋、舟屋のように建物内に水面を引き込んだ家、敷地内に水路を引き込んだ住宅、庭の芝生で日光浴、水上交通で出動 【図出典: <a href="https://www.dezain.net/">dezain.net</a>】</p>	
<p><b>C: 人道橋</b></p> <p>開発地からのアクセス路、歩行者・自転車・マイクロモビリティが行き来し、橋上で運河の水辺イベントや水上競技を観覧 【図出典: ニューヨーク ハイライン <a href="https://www.pinterest.jp/pin/710935491156863763/">https://www.pinterest.jp/pin/710935491156863763/</a>】</p>	
<p><b>D: 本宮新橋橋詰広場</b></p> <p>陸と運河の間を人が行き来する拠点になっている、川へのスロープ、浮き棧橋、マルシェ、緑がある広場、水を引き込む広場、水辺で遊ぶ人、泳ぐ人、釣りや水上が空飛ぶ車の発着場</p>	
<p><b>E: クロス人道橋/荒子川運河東端の空き地</b></p> <p>橋は東西南北をクロスしてつなぐ、人・スマートモビリティが行き来している、東から買い物して帰る人、マイクロモビリティで移動する高齢者、水上スポーツの拠点になりアスリートが運河と陸地を行き来している、艇庫(シャワールームや水辺アクティビティ倉庫)、川へのスロープ、アジア大会競技でもあるカヤック、カヌー、ヨット、SUP、渡し船的な水上スマートモビリティ、観覧席、芝生、BBQ 【図出典: 小名木川クローバー橋 <a href="https://koto-kanko.jp/tourism/detail_spot.php?sid=S00120">https://koto-kanko.jp/tourism/detail_spot.php?sid=S00120</a>】</p>	

表3 水辺再生ロードマップ案

2023	2024	2025	2026 アジア大会	2027	2028 まち開き	2029	2030	2031	2032	2033
勉強会 に ぎ わ い 検 討 会	水 辺 に ぎ わ い 検 討 会	マルシェ	予算化 整備	予 算 化 整 備	親水広場 本格運用	→	水 際 カ フェ ・ レ ス ト ラ ン 本 格 運 用	→		ク ロ ス 橋 ・ プ ロ ム ナ ー ド ・ 人 道 橋 ・ 南 北 道 路
		水辺イベント								
		本宮新橋テラス								
		水上イベント	予 算 化 整 備	予 算 化 整 備	船着場 艇庫等 本格運用	→	水 際 カ フェ ・ レ ス ト ラ ン 本 格 運 用	→		ク ロ ス 橋 ・ プ ロ ム ナ ー ド ・ 人 道 橋 ・ 南 北 道 路
		浮き棧橋								
		仮設艇庫								
			建物調査・誘致・整備							
					調査・事業計画・設計・予算化・用地買収・整備					供用開始

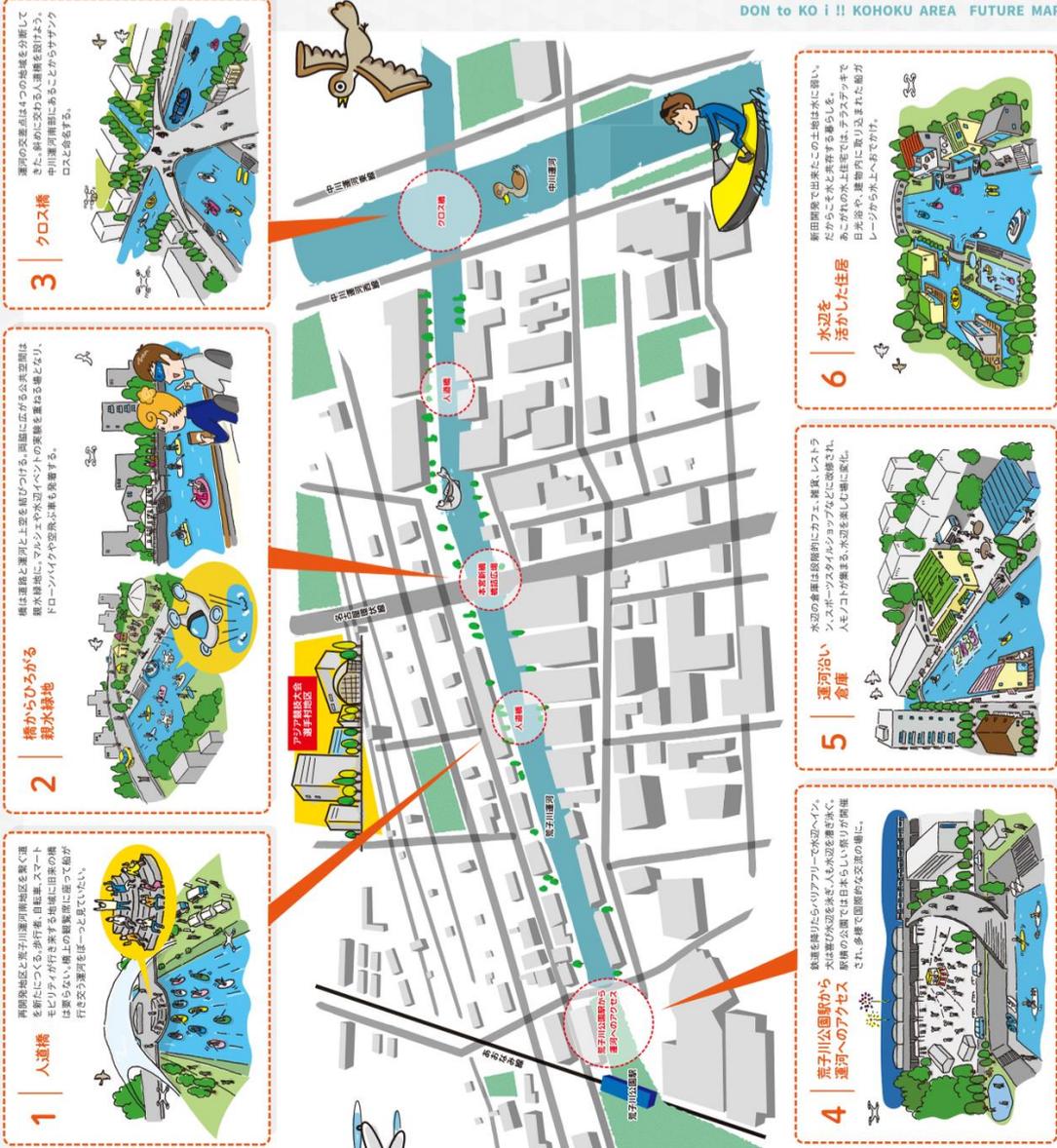
<補注>  
 緑枠・緑文字: インフラ整備  
 オレンジ枠: ソフト施策

当該地域は2026年にアジア大会、その後の2028年に選手村後利用事業のまち開きを予定している。そこで、10年後の2033年を目指した将来ビジョンの検討を行い、本研究委員会の成果物として『ドンとコい!! 港北エリア未来地図』(図1)をとりまとめた。港北エリア未来地図を実現するには、2024年までに有志による水辺にぎわい検討会を組織し、まち開きが行われる2028年に親水広場や船着場が運用でき

るよう、マルシェや水辺イベントなどのソフト的なまちづくり活動における実証を行いながら予算化・インフラ整備を行う必要がある。さらに、それらの動向を踏まえながら2030年にカフェやレストランの運用、2033年には水辺全体に関わるプロムナードやクロス橋等のインフラ供用開始を目指し、ソフト施策とハード施策の段階的かつ同調的な施策展開を考慮したロードマップ(表3)を立案した。

# 2023 ドンとコイ!!! 2033 港北エリア 未来地図

DON to KO i !!  
KOHOKU AREA  
FUTURE MAP



**3 クロス橋**  
運河の交差点は4つの地域を分離して来た。移めに交わる人連橋を架けよう。中川運河両側にあることからササナクロスと名を付ける。

**2 橋からひろがる親水緑地**  
橋は運河と運河と上を結びつける。両側に広がる公共空間は、排水緑地にマウンテンバイクや水辺での水遊びの体験を重ねる場となり、ドロップアウトが空気に染み渡る。

**1 人連橋**  
両岸地区と荒子川運河両岸地区を繋ぐ運河に渡る歩行者、自転車、スリムなモーターボートが行き交う。歩行者は歩道、自転車は自転車道、モーターボートは運河に寄り添って航行する。歩行者は歩道、自転車は自転車道、モーターボートは運河に寄り添って航行する。

**6 水辺を活かした住居**  
新田開発で出来たこの土地は水に近い。だからこそ水と共存する暮らしを。あこがれの住居は住宅でも、オフィスでも、レジャーから水上へまであり。

**5 運河沿い倉庫**  
水辺の倉庫は段階的にカフェ、雑貨、レストラン、スポーツスタジオ、ショップなどに改築され、人モコが生まれ、水辺を活性化させる。

**4 荒子川公園駅から運河へのアクセス**  
駅を降りたらバリアフリーで水辺へ。水辺の魅力を伝える人も水辺を歩く。駅周辺の公道では水辺らしい暮らしが展開され、多様な国際的な交流の場。

2026年に愛知・名古屋で開催されるアジア競技大会の選手村が名古屋競馬場跡地に置かれた後、一帯では再開発事業が行われることになっています。水質、災害リスクの面から弱点ともされる中川運河、荒子川運河を見つめ直し、水辺の魅力を加味して周辺地域もあわせて発展することを願っています。運河、道路などのハード整備とマリン施設などの実験的な活動を適切なタイミングで組み合わせることが有効と考えられます。ハード整備によって諸活動が活発化し、それによってさらなるハード整備が必要となり、さらに新たな活動が生まれる、といった好循環をもたらすよう、周辺地域の様々な主体が関わってエリアマネジメントを進めていくことを提案します。

### 3. 再開発地と周辺地域との連携に向けて

前章で検討した荒子川運河を軸とした水辺の再整備は、港北エリア（地図1）の屋台骨となる重要な位置づけである。他方、再開発地周辺に目を向けると、高齢化が顕著な住宅団地を有し、多数の都市公園が点在、先行再開発地も隣接している。エリアとしての魅力度を高めるためには、これら近隣施設と選手村後利用事業により再開発される地区との連携策も検討していく必要がある。

#### (1) 周辺地域の現状

再開発地周辺の居住環境の課題は、大規模な市営住宅団地（図2点線枠内）があり高齢化が顕著である。また、買物施設が少なく、運河等でアクセス経路が限定される影響もあり買物不便度合いが高い住戸（図2オレンジ色の住戸）が存在している。



図2 高齢化地域と買物不便地域

また、港北エリアは名古屋港に近接している水災害ハザードエリアであり、今後の公園に求める機能として『防災機能の強化』を望む意向も高い。さらに、当該エリアには街区公園～都市公園まで大小13の公園を有しているが、子育てしやすい環境である

と感じている割合が低いことも課題である。

#### (2) 連携施策の提案

再開発地内にも公園が整備されるが、東側に近接する土古公園はスポーツ関連施設や広場など健康維持機能が充実している。日頃から地域住民が利用している施設であるため、『バリアフリー化や防災機能を充実させる再整備』を提案する。再開発地西側の荒子川公園は、花見やBBQなど地域内外からの来訪者が多い公園である。公園の役割を更に充実させるためにも、『民間企業と連携した子育て世代にやさしい施設整備や、災害時にも利用できるようキャンプ等のアウトドア施設の充実』を提案する（図3）。

また、今後の更なる高齢化に備え交通弱者の移動支援・買物地域の解消・回遊性の向上を目指して、『低速で周遊するグリーンスローモビリティの導入検討』を提案する。電動バスの導入により環境への配慮や災害時にも活用できるインフラとなる（図3）。

### 4. 産官学民の連携に向けて

民間企業が主導する再開発は開発地域内の機能や設備が重視される傾向にあるが、当該エリアの都市整備は名古屋市都市計画マスタープランにも位置づけられ、行政計画（港北エリアまちづくり将来ビジョン）も策定されている。

インフラ整備とソフト施策を同調的に進めていくには、3章で提案した水辺にぎわい検討会や、地域交通検討会・公園活用検討会など、個別テーマ毎にエリア内の関連主体や地域外からの有志による活動団体を組織化していく必要がある。また、アジア大会を契機とした地域住民によるボランティア団体の組織化も目指すことができる。2028年の再開発地まち開きに向けて、地域住民・再開発事業者・先行再開発事業者・個別テーマ活動団体が共創できるエリアマネジメント団体の組織化が望まれる。



図3 近隣施設との連携施策案